

高魂士人

川口松太郎

昭和四十二年七月一日 印刷
昭和四十二年七月五日 発行

著 者 川口松太郎
発行者 矢 貴 東 司
印刷者 堀内文治郎

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋鰯殺町一ノ二
電話（六六六）四〇〇一、二番

商魂さん
定価四二〇円

落丁、乱丁はお取り
かえ致します



商
魂
さ
ん

長
編
小
説

题字 装帧
川口松太郎 岩田専太郎

おふくは十七であつた。

下ぶくれの丸顔で、おかめの面に似ているのでおタヤンと呼ばれて、誰からも可愛がられた。大阪ではおかめをお多福という。

本名は山辺福子。

十三のとき縫子見習に入り、今では衣裳方の助手で新派の受持ちになっている。

生来の芝居好きで、舞台を見て仕事をとちって叱られる事はしょつ中だ。受持ちの衣裳も、喜多村だの花柳だのの座頭格は頭の係で、中幹部や大部屋の役者に衣裳を着せるのが、おふくの役目だ。立役は簡単だが、女形は衣裳の選み方と着せかたにコツがあつて着せる事は出来ても選み方はなかなか出来ない。役によると新しく白生地を染めたり、反物を切ったり縫を入れたり、早替りの仕掛け物なぞは、縫い方にも秘伝があり、この道で長年年期を入れたものでなければ、扱えない仕事だ。

おふくは会社に入つてまだ四年にしかないが、幹部さんたちに可愛がられて、頭が風邪をひいて寝たりすると、臨時代役で喜多村先生や花柳先生の衣裳を着せることも珍しくなかつた。

女の衣裳方が着せると着崩れるといって嫌われるものだが、おふくだけは例外で

「おふくの帯はよう締る。女のくせに力があって崩れない」

と、花柳は特におふくをひいきにした。短かい間に修業して腕を上げたのだ。

新派の芝居にもときどき立ち廻りがあって、舞台で衣裳のほころびる事がある。そんな時にはおふくが道具裏に待ち構え、糸を通した針を持ち、手早くさっとつくろって、次の場面へ出て行くまでに用意をして置く。その縫い方が目にもとまらぬ早さで、俳優が舞台へ引返しても衣裳の乱れを感じさせない。

そういう気転のきき方が役者たちを喜ばせ、袖口がほころびたり、衿の縫い目が気に入らなかったりすると「おタやんを呼べ」と、どの部屋からも声がかかる。大幹部からかかる事もあるし、大部屋からたのみに来る事もあるが、座頭（ざがしら）から頼まれる時も、大部屋の下っ端役者から頼まれる時も区別なく、誠意をこめて仕事をする。

おふくの人気はそういうところにあった。

新派は道頓堀の角座に出ていて、喜多村緑郎が座頭、花柳章太郎が書き出して、昼夜二回、半月ごとに狂言替りというあわただしい仕組みだ。朔日の初日が開いたかと思うと、次狂言の準備にかかって、衣裳集めをしながら、毎日の衣裳方を勤める。朝早くから夜遅くまで、こま鼠のように働き廻っているが、厭な顔一つするではなし、何時もにこにこ笑いながら部屋から部屋へ飛んで歩く。

「おふくは一座の宝だ」

と花柳は何時もおふくを褒めた。

「おふくはおふくでも福俵ふくだわだっしゃろ」

大阪娘で言葉にも愛嬌があった。

「よく駄が続くな、おふくの休んだ日を見た事ない」

「そうだと。うちはぞっきん（雑巾）で何ぼ使つかても破れしまへん」

「お前みたいな女を女房にしたら得だなア」

「うちみたいなもん、旦那さんのなりてがおますかいな」

「何ぼでもあるぞ。氣立てがようて働はたらきがあつて、誰にも可愛がられる愛嬌者だ。俺だつて貰うよ」

「阿呆らし」

と、相手にもせず

「うち旦那さん持ったら一人で働いて大事にします」

「そらいいなア、役者やめておふくの亭主になるか」

「せんせみたいな浮気もんは厭いとだす」

「おふくの亭主になれるのやったら浮気もやめる」

「いうたかてあきまへん。先生のは女ごの方が捨てておかんさかい、そんな危ない旦那はん持てまへんわ」

あとはけらけらと笑つて衣裳部屋へ飛んで帰る。

「可愛い奴だなア」

と、目を細めて信吉へ

「あいつ、男を知ってるだらうか」

「知らないようだぜ」

信吉は躊躇なくいった。

「芝居に働いている女は、なまじっかの堅気より堅いんだ。海千山千のじゃじゃ馬を相手にしているから、どんな事にも驚かぬ勇氣が出来る。大部屋の連中にかかって見る。おふくが入って来るとわざと大声で猥談を初めるんだが、何をいわれたって受けつけない。立派なもんだ」

「あいつは舞鶴の漁師の子で、一人で大阪へ来てるんだから、誘惑されやすい条件なんだがなア」

「東京へ連れて行きたいな。東京もどうせ二部制なんだから、馴れた者のいた方が便利だ」

「君からもすすめてくれよ。他の芝居に取られるのは惜しいや」

花柳はしきりに惜しがって、東京へつれて行きたがった。花柳ばかりでなく、一座の全部が同じ思ひだった。

信吉は作者兼演出家の名目で、頭取部屋とうどりにごろごろしながら次狂言の工風をしたり、脚本を書いたり、給料は僅かだが、楽屋に入りびたっていた。

「花柳はお前を欲しがってるぜ。一緒に東京へ来るようにすすめてくれといわれてるんだ。一緒に行けよ」

「うちかて行きとおまんねん。浅草の松竹座へ出やはるのやろ」

「まだはっきり決ってないが、多分そうなるだらう」

「浅草はよろしなア」

と、憧れるような目をしたが、行くとはいわなかった。

大正の終りで、不況風の吹き荒れていた時代、商売の町の大阪は、不景気になると、道頓堀もがったりと人出が少くなる。

新派の芝居もそのあおりをくって、花柳たちは東京へ帰って浅草の松竹座へ出る予定になっている。いわば新派が道頓堀最後の興行で

「せんせがお帰りやしたら、道頓堀には新派の芝居が無うなっています」

おふくは泣きそうな目をした。

「時世時節で仕方がないよ。ひと頃は道頓堀の人気を一人占めしていた新派が、落ちぶれて東京へ引きあげるんだが、おふくも東京の衣裳部へ籍を移せ。俺が話をつけてやる」

「へえ」

「新派の他の衣裳をつけた事はないだろう。俺たちがいなくなったあとは、曾我廼舎そがのやの喜劇か剣劇ばかりだぞ」

「いやだす。うちは新派の他の芝居は知りまへん。せんせと一緒に東京へ行きたいけど、あきまへんわ」
「何であかん。一座はみんなおふくを愛している。おふくがいてくれると安心して芝居が出来るんだ」
「うちかてせんせが一緒だと楽しんで仕事が出けます。家にいるより楽屋にいる時の方が多いし、こんなに可愛がってもらて、ほんまに別れが辛おます」

「だから一緒に行けよ。俺の係りで行けばいいじゃないか」

「けどなアせんせ、うち旦那はんが出けましてん」

「ほんとか」

花柳は顔を変えた。

「他の人には隠しても、せんせには隠せしめへん」

「そうか。旦那さんが出来たのか」

「へい」

「そんなら目出度いな」

「すんまへん。うちのようなもんでも一緒になってくれはるいうんで、女の運を逃してはならん思いまして」

「何する人だ」

「それ訊かんといて下さい。何にも訊かんと、おふくに旦那はんの出けたことだけ、喜んでくはなれ」

「ふうん、そうかそうか」

と、あとは聞かず、残念そうに黙ってしまった。

旦那さんがきまったばかりでなく、おふくは既に、子供を持っていた。東京へ出たいことはやまや

まだが、お腹に子がいてはどうしようもない。

相手は同じ仲間のしゅん平という衣装方だ。ほっそりとした痩せがたで、小あらい唐棧とうせんの着つけに献上の帯をきりとしめ、なりふりも物腰も好いたらしく見える三十男、本名は山本俊吉だが、仲間ではしゅん平で通って、極道ごくどうを看板にかけているような職人だ。

初めは誰も氣のつく者がなかった。もの固いおふくが、しゅん平のような極道男を相手にする筈がないと思われていたが、おふくはしゅん平に惚れてしまったのだ。極道だと判っているながら口車に乗せられ、お腹に子供まで宿してしまった。

初めのうちはしゅん平が近づいても相手にもせず

「あんたみたいな極道もんの相手になる女ではない。お門違いや」

と、はねつけていたのだが、そんな事でひるむようなしゅん平ではなく

「わしかて三十をすぎた。そろそろ身を固めな世間の信用がつかん。極道はしていても遊び相手と女房にする女との区別はつけてある。この辺で身を固めたいと思うのや。わしと夫婦になってくれ」

そんな風に持ちかけた。極道も否定せず、生活を改めて家庭を持ちたいとまことしやかにいった。

おふくはまんまと引かかった。引かかってはまだ

「いかんいかん、うまいこというて騙そとしても、その手には乗らんぞ」

と、警戒していたのだが

「衣裳にかけては会社のうちでも一二を争う腕っこきや。それはおふくも知ってるやろ。おふくは新派専門だが、わしは中座で成駒屋の衣裳を扱ったこともあり、やかましやの五郎さんと渡り合うたこともある。沢正さんが弁天座で旗上げた時には、わしが衣裳方の頭やった。どんな一座へ入ってもこなせる修業を躰の中へ沁み込ませてあるのや。おふくかて好きでなった衣裳つけ、同じ道に働く者同志が、一緒になって共苦勞しようやないか」

うまい殺し文句だ。おふくにしても、好きでなった衣裳方だけに、所帯を持っても仕事は続けたい

気があった。「旦那を持てば働いて貢ぎます」と、花柳の前でいったのも、衣裳の仕事だけはやめたくない下ごころがあったからだ。

もししゅん平が堅気になって、本心から夫婦になるのだったなら、これにまさる俸せはない——と。おふくの急所だった。しゅん平はその急所を知っていて

「わしかて、堅気の娘を貰うたところで面白うもない。永年幕内に暮していれば結局は女優の下っ端か、売りくずした三流芸妓か、芝居茶屋のお茶子でも探すのがおちや。どれもこれも嬉しゅうないわい。そこへ行くとおふくは同業、小さい時から同じ会社について、気ごろも判っている。わしにとつてこんないい相手はないのや。さんざん極道は尽したが、三十になったのをしおに家を持ちたいと思う。なアおふく、承知してくれへんか」

そんな風に持ちかけられると物堅いおふくにも迷いが出た。堅気になりたいと、繰り返していうしゅん平の言葉に惹かれたのだ。

遊び馴れて、女を知りぬいているしゅん平は、迷いの出たおふくの気持を、鏡へかけるように見抜いて次ぎ次ぎに甘い声を浴びせかけた。

さりとて騙す気もなかった。おふくと夫婦になれば共稼ぎが出来る。病気でしめた時には安心だと、そんな功利心もあつての上だが、芝居の幕間の衣裳部屋で、人のいない留守を見計ってぼそぼそ話をするばかりだったから

「わしの気持をもっと落ついたところで聞いてくれんか。楽屋では気が散って思うようにいえん」と、いい出した。

「うちかてそうや。仕事のあいまに聞くだけでは、ほんまに思えん」

「じゃ、来月は芝居が休みになるよって、千秋楽ちゆうらくの翌つぎの日、何処どこぞへ行けへんか」

「何処行くねん」

「ゆっくり話の出けるとこがええな。日帰りであえさかい、行きたいと思うところないか」
ちょうど暑い盛りの七月だったので

「舞子の浜か、淡たんの輪わへ行きたいな」

おふくは自分から望んだ。

「淡の輪は魚釣りの場所やし、落着くのに舞子があえ、舞子へ行こ、水も綺麗やし眺めがよろし」
「海水浴出けるか」

「そら出けるけど、海が深いよって、泳ぎのよう出ける者でうては危ないらし」

「うちは舞鶴の生れで泳ぎだけは自信おもうがある」

「ほなら、行こ。泳げる者には面白おもしろい海や」

そんな事で話が決って、千秋楽の次の日に梅田の駅で待ち合せて山陽線の汽車へ乗った。神戸から先へは電車の通じていない頃だ。

「とうとしゅんやんに騙されて来てしもた」

三等車へ並んで坐るとおふくはいった。

「それでええやないか。男か女か、どっちか騙さん限りは話はまとまらん。これでええのや」
しゅん平は勝ち誇った顔をした。連れ出してしまえばこっちのもんやといわんばかりに

「おふくとは浮気する気あらへん。一緒になって所帯を持つ気なら騙されたかてかめへんやないか」
「何処まで信用出ける人か判らへんよってなア」

「一人でいる時と、女房を持った時とは考えが變るわい。おふくかて一生一人でいる気はないやろ。その上、あんたは仕事が好きや。衣裳いじる事が何より好きと違うか」

「そうやねん。花柳せんせの衣裳たんで袴の衿についた白粉を、キハツで拭き取っていると何ともいえんええ氣持になるのや。ほんまの芝居好きやなア」

「それはわいかて一緒やないか。楽屋ぐらしの面白さに馴れた者は、他のところでは働けん」
「そうや、うちは結婚しても仕事はやめんつもりでいた」

「だからわしと一緒にしてくれ。わしかて助かる」

おふくはうなずいた。一緒に行こうといい出す上は、しゅん平を受けいれる下心も充分だ。

去年の夏のこと、まだ十七でも躰は出来ていて、二十歳^{はたち}をすぎて見えるほど背が高い。親が漁師で、荒仕事を手伝わされて成長が早かったのと、芝居の楽屋の卑猥^{ひわい}な話に馴れて、性の知識もあったから、経験はなくとも耳学問は持っている。

親を頼れない境涯だけに、自分にふさわしい相手がいたら、夫婦になってもよいと考えている矢先でもあった。いって見ればしゅん平の出現は、おふくの間隙へつけ込んだようなもので、舞子へ行くことも男を許す意味に通じ、十七でいながら何の苦もなく結びついてしまった。

浜はおびたらしい人出だが、海がいきなり深いので、熟達した者でなければ入れず、泳がずに遊んでいる者の多い中で、おふくは抜き手を切って沖の方まで泳いだ。目の前には淡路島が横たわり、内

海だけに浪も静かで、泳げる者には持って来いの海だ。

しゅん平は泳げなかったので、砂の上から見ていたが、泳ぎ疲れて水から上って来たおふくの臍を見てぎょっとした。海水着がびったりと臍へへばりつき、乳房のあたりが小山のように盛り上って、画に描いた裸女のように形がよく、乳房から腹部へ落ちて行く曲線のなだらかさは、お多福の顔に似合わしからぬ美しさを持っている。

大正の末年であるから、海水着も今のように臍を露出したものではなく、半身は殆ど被^{おお}われ、両方の腕だけが出ていて、足は膝の上まで水着がかぶさり、腹に当たる部分には白いゴムのベルトを廻している。そんな野暮ったい水着であっても、その下に包まれたおふくの臍は素晴らしいものだった。ブラジャーというものもない頃で、乳の形がへばりついた水着の上からはっきり見えていて、しゅん平は思わず舌なめずりをしてしまった。

舞子といっても一流の旅館へ泊る身分ではなく、彼にしては思いきってはりこんだつもりなの××館という二流だが、それでもおふくは

「宿賃は高いのやろな」

と、心配そうにいった。

「わしはおふくのそういうところが好きや、男と遊びに来て宿賃を心配するのは女房のすることやで」

「他の女はせえへんのか」

と、聞きとがめて皮肉をいうと

「わしらの相手になる女は、舞子の浜へ泳ぎに来る手合とは違う。座布団裏返しして花札まくような

女ばかりや、こんな浜へ連れて来て海水着させたら、猿が水あびするのと一緒で、見てられん。わしゃおふくの水着姿を見て驚いたぞ。お前の駄つきは東京の逗子鎌倉へ連れて行ってもひけは取らん。綺麗な駄してやる」

「そんなところばっか見てたんかいな、いやらし」

「ほんまに感心してしもて、衣裳屋さしとくのが惜しゅうなったわ」

「うまいこといいよる。しゅんやんは口がうまいさかい、その手で女ごが騙されるのやろ。うちもその一人になってしもた」

と、嘆ずるようだったのであったが、それも口先だけのことで、本心は自分から男に打ち込んでいたのだ。

初めは泊るつもりもなかったが、結局は泊ってしまつて、しゅん平の女捌きにあやつられ、うまうま術中に落ち入つて、一晩中極道男に翻弄された。年は十七でも堅気娘の二十三の値打ちはあるだけに、初めて男に接するだらしのなさもなく、さりとて色町女のような図図しさもなく、しゅん平にとっては気楽で好ましい相手だった。

二

二人の仲は誰にも知れなかった、そこは道楽者だけに、楽屋では顔にも出さず、薄情なほど知らん顔をしていたし、おふくも仕事と私事ははっきりと区別する気でいたから、お互いに口をきかず、昼